一刀領談

下條正男

しもじょう・まさお　長野県出身。国学院大大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、2021年3月末で退官した。島根県の第5期竹島問題研究会の座長を務める竹島研究の第一人者で、23年3月末まで本紙客員論説委員を務めた。拓殖大名誉教授。74歳。

対日関係で二つの主張

韓国側の本音は？

島根県の「竹島の日」記念式典があった2日後の2月24日、韓国の慶尚北道で「独島平和管理民官合同会議」が開催され、李喆雨知事が「民間交流の活性化など、新しい韓日関係を構築し、量的・質的次元で画期的に発展できるように」と述べた。

それは、慶尚北道が記念式典当日に発表した「島根県の独島の日記念行事に対する糾弾声明書」で、「日本は無謀な歴史歪曲の野欲を止め、誠実な反省の姿勢のため、新しい韓日関係を醸成するため前に進むことを強く求める」としたのとは趣が異なっていた。

■隠岐集会が発端

糾弾声明書が表向きの対日姿勢とすれば、合同会議の発言は慶尚北道側の本音と言える。

それは3月1日の「三・一独立運動記念日」に、崔相穆韓国大統領代行が「両国が共に過去の痛みを癒やしながら、韓日関係の新たな章を開いていくことを期待する」「今の厳しい国際情勢に効果的に対応するためには、韓日の協力が必要だ」などと演説したのに近いからである。

本音と建前が表面化した発端は、昨年11月9日に島根県隠岐の島町で14年ぶりに開催された「竹島領有権確立運動隠岐の島町集会」のライブ配信だった。

韓国の「三・一独立運動」を記念する政府式典で演説する崔相穆大統領代行＝1日、ソウル（共同）

その際の講演で、私が鬱陵島と隠岐諸島を結ぶ航路を開設した日韓の交流を提案すると、李知事は糾弾声明文を発表。その中で「(日本は)独島の〝大韓民国の主権〟を認め、未来志向的で友好的な韓日の地域交流と協力時代に向かうことを求める」としていた。

さらに「竹島の日」記念式典後の講演で再び日韓の交流促進を提案すると、李知事は建前を一転し、2日後の合同会議で冒頭の総括をしたのである。

■島根県の思い？

だが韓国内にはこの潮流を喜ばない人々もいる。韓国の革新系メディアの「オーマイニュース」（電子版）が2月24日に報じたキム・ジョンソン氏の記事「日本の極右が尹錫悦糾弾阻止を望む理由」がそれだ。

そこでは私が書いた1月13日付産経新聞（電子版）のコラム「竹島を考える」と2月15日付山陰中央新報の当コラム「一刀領談」を取り上げ、冒頭で「韓国の極右は弾劾の海で尹錫悦を考えるが、日本の極右はその海を見て独島を考える」と記し、私を「日本の極右」と批評していた。

「一刀領談」から「尹錫悦氏が大統領に就任し、日韓関係は画期的に改善した」とした一文を引用し、続いて「尹錫悦の独島消しを批判してきた(最大野党の)『共に民主党』が尹錫悦弾劾を推進している」と記すことで、大統領が拘束された事態をあえて〝暗雲〟とするためだった。

その〝暗雲〟は電子版の「竹島を考える」の表題「韓国・尹錫悦政権崩壊なら竹島問題解決に暗雲、『103万円』の壁では反日の荒波防げず」から取ったもので、本来の紙面の表題は「『朝三暮四』、103万円の壁と年金」だった。

そこでは緊迫する東アジア情勢をよそに、会社員など給与所得者の所得税の支払いが発生する「103万円の壁」の扱いを巡り熟議中の国会の「暗愚」を揶揄していた。

それをオーマイニュースは、「日本の極右が尹錫悦糾弾阻止を望む理由」として「尹政権の失墜」を〝暗雲〟とし、拙稿の表現だけを使って反日感情をあおっていたのである。

3月7日の参議院予算委員会で、自民党の佐藤正久議員が竹島問題について触れた。これに石破茂首相は「島根県の思い」にどう応えるかとしたが、竹島問題は島根県だけの問題ではない。それに日韓の交流を求める韓国側の「思い」にはどう答えるのか。石破氏には「熟慮」を期待したいものだ。

＝随時掲載＝